

# 東シナ海開戦 1

香港陥落

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

## 目次

プロローグ	11
第一章 西門町	17
第二章 東沙島	39
第三章 日月潭3号作戦	67
第四章 ヘブン・オン・アース	94
第五章 反テロ調整室 <sup>R</sup> <sub>T</sub> <sup>C</sup> <sub>N</sub>	123
第六章 消えた乗組員	149
第七章 マーフィの法則	177
第八章 上海寄港	201
エピローグ	215

# 登場人物紹介

## 日本

### 〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい  
土門康平 陸将補。水陸機動団長。出世したが、元上司と同僚の行動に振り回されている。

### 〔原田小隊〕

はらだたくみ  
原田拓海 一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊した。今回、記憶が無いまま結婚していた。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん  
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ  
大城雅彦 一曹。土門の片腕としての活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお  
水野智雄 一曹。元体育学校出身のオリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた  
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き  
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

### 〔姜小隊〕

かんあやか  
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目をかけられ、日本人と結婚したことで部隊にひっぱられた。

うるしぼらたけとみ  
漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。分隊長。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける  
井伊翔 一曹。高専出身で部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

み どうそう ま  
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ  
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大物。コードネ

ーム：ボーンズ。

かわにしまさみ  
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ  
由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：  
ニードル。

おだぎりしょう  
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェ  
イス。

あびるあきら  
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：  
ダック。

あかばねたくま  
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネー  
ム：シェフ。

### 〔訓練小隊〕

あまひひろし  
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田の同期。  
訓練小隊を率いる。コードネーム：フアラライ。

### 〔民間軍事会社〕

おとなしせいじ  
音無誠次 土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。  
"ヘブン・オン・アース、内に滞在していた。

### 〔西部方面普通科連隊〕

しばひかる  
司馬光 一佐。水陸機動団教官。引き取って育てた娘に店をもたせ  
るため、台湾にいたが……。

### 〈海上自衛隊〉

さきまさあき  
佐伯昌明 元海上幕僚長。太平洋相互協力信頼醸成措置会議の、日本  
側代表団を率いる。

かわはたゆたか  
河畑由孝 海将補。

しもぎのしげき  
下園茂喜 一佐。首席幕僚。

いせぎまたもつ  
伊勢崎将 一佐。第一航空隊司令。

### 〔第一航空群〕

うめだひろおみ  
梅田博臣 三佐。第一航空群第一航空隊。P-3Cで一五年のキャリ  
アをもつ。

やはたしん  
八幡晋 三佐。戦術航空士。コクピット後部のTACCO席に座る。

こむらみさき  
木暮美佐紀 一尉。P-1からスタートした幸運な一期生。

### 〔豪華客船 "ヘブン・オン・アース、〕

こねえだひゅうま  
是枝飛雄馬 プロオケを目指していた青年。プロオケの先輩から誘わ

れ、<sup>レ</sup>ヘブン・オン・アース、に乗り込んだ。

<sup>なみかわまほみこ</sup>  
浪川恵美子 是枝が思いを寄せるピオラ奏者。音楽教師を三年で辞めて、奏者に復帰した。

## //// アメリカ //////////////////////////////////////

〈陸軍〉

マーカス・グッドウィン 中佐。グリーンベレーのオブザーバー。

〈海軍〉

クリストファー・バード 元海軍少将。太平洋相互協力信頼醸成措置会議のアメリカ側代表団。佐伯昌明元海上幕僚長のカウンターパート。

〈海兵隊〉

ジョージ・オブライエン 中佐。海兵隊オブザーバー。

## //// 中国 //////////////////////////////////////

〈海軍〉

<sup>トンシィアオニン</sup>  
東 曉 寧 海軍大将（上将）。

<sup>ホワイーチィ</sup>  
賀一智 海軍少将。艦隊参謀長。

〔第 164 海軍陸戦兵旅団〕

<sup>ヤオイェン</sup>  
姚彦 少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

<sup>ワンヤントン</sup>  
万仰東 大佐。旅団参謀長。

<sup>レイイェン</sup>  
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。中佐、兵站指揮官だったが、姚彦が大佐に任命して作戦参謀とした。兵士としては無能だが、作戦を立てさせると有能。

<sup>タイイーチィ</sup>  
戴一智 少佐。旅団情報参謀。情報担当士官だったが、上官が重体になり旅団情報参謀に任命された。

（台湾）

<sup>ライシィアオチャオ</sup> <sup>ロンユン</sup>  
頼筱喬 サクラ連隊を率いて戦死した頼龍雲陸軍中將の一人娘。台北で新規オープンした飲茶屋の店主。司馬光が“チャオ”と呼び、店の開店を支援している。

<sup>ワンチーハオ</sup>  
王志豪 退役海軍中將。海兵隊の元司令官で、未だに強い影響力をもつ。王文雄の遠縁。

第90  
王文雄 ワンウェンション 司馬の知り合いで、司馬は「フミオ」と呼ぶ。京都大学法学部、大学院に進み、国民党の党職員になった。今は、台日親善協会と党の対外宣伝部次長。

## 〈台湾軍海兵隊〉

### 〔第99旅団〕

陳智偉 チェンヂーウェイ 大佐。台湾軍海兵隊第99旅団の一個大隊を指揮する。

黄俊男 ホァンジュンナン 中佐。作戦参謀。大隊副隊長でもある。

吳金福 ウージンフー 少佐。情報参謀。

楊志明 ヤンヂーミン 二等兵。美大を休学して軍に入った。

## 〈空軍〉

李彦 リーイェン 空軍少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

劉建宏 リウジエンホン 空軍中佐。第17飛行中隊を率いる。

## ///シンガポール///

### 〈インターポール・反テロ調整室〉

許文龍 シユウェンロン 警視正。RTCN代表統括官。

メアリー・キスリング RTCNの次長。FBIから派遣された黒人女性。

柴田幸男 しばたゆきお 警視正。シンガポールのインターポール・反テロ調整室に警察庁から派遣されている。

朴机浩 パクギョムホ 警視。シンガポールのインターポール・反テロ調整室に韓国警察から派遣されている。

## ///イギリス///

### 〈英国対外秘密情報部 (MI6)〉

マリア・ジョンソン オーバーロード MI6極東統括官。大君主。





東シナ海開戦1

香港陥落



## プロローグ

キプロス船籍のコンテナ船「グイースト・オリンピア」号（五〇〇〇〇トン）は、今となつてはいささか他の大型コンテナ船に見劣りしていた。すでに三〇年間運航されており、船体はあちこち錆びついている。

大きさをたいしたことはないが、逆にそれが歓迎される港がある。

現代のコンテナ船は大型化しすぎた。大型化すればするほどスケールメリットは出てくるが、逆に入港できない港も増えてくる。

特に日本がそうだ。釜山プサンには入港できるが、隣国日本には入港できない。そんなサイズのコンテ

ナ船が、次々と就航していた。

こういう場合は荷物をいったん釜山で降ろし、日本行きの船に積み直すこととなる。また、香港ホンコンで降ろし、より小型のコンテナ船に積み替えて台湾ワン、日本へと回ることもあった。

このコンテナ船も、そういう船だった。一〇年間、マラッカ海峡から西へ向かったことはない。もっぱらシンガポール、香港シヤンハイ、上海タイペイ、台北ゴウ、神戸、釜山を回っていた。

そしてこれが最後の航海だった。この航海が終われば、終着地であるインドへ回航し、スクラップとして解体される予定だ。クルーもいったん解

散となり、また別の船に乗り込むことになった。

香港沖四〇〇キロの南シナ海洋上で、くたびれた漁船から瀕死の客を収容した時も、コンテナ船は速度を落とさなかった。

昨今、全ての外洋船舶はGPSの航法システムを搭載し、その情報には誰でもアクセスできる。もちろんそれをオフにすることは可能だが、それをやると各国の情報当局に「罪」を自白するようになるのだ。停波している間に何かよからぬことをしていたのではないかと、いらぬ注目を浴びることになるのだ。

収容した客人は、幅寄せして併走する漁船から命懸けで乗り移った時には、酷い船酔いでふらふらだった。その状態でずぶ濡れのまま船長室に案内され、睡眠導入剤を与えられて翌朝まで眠り続けた。

乗組員は何も詮索しなかった。時々、このようなことはある。事情を知る必要がある者には、それなりの口止め料がボーナスとして支給されるのだ。

イースト・オリンピア号はそのままバシー海峡を通過して太平洋へと出ると、南西諸島沿いに航海し、一路横浜へ向かった。

当初、客人はそこで降ろされる予定だったが、深夜、沖縄本島東を航行中にアメリカ軍のヘリが飛んできた。暗がりでも、ヘリコプターの種類はわからない。空軍のヘリか、海兵隊のヘリなのかわからなかった。

翼端灯の類は一切点灯していない。ただ、客人をブリッジの屋根に乗せろと命令される。

誰かがヘリからホイストで屋根に降り立つと、客人を連れて引き揚げていった。

その間もコンテナ船は一切速度を落とさず、針

路も変えなかつた。辺りに他の船舶はいない。だが時々、水上レーダーには奇妙な陰が映つた。高速で移動している。航空機だ。

すぐに哨戒機が低く降りてきて周辺を旋回する。おそらく他の船舶を警戒しているのだろうと、フイリピン人船長は思った。よほどのVIPなのか。だが彼はそれ以上、客の正体は詮索しなかつた。

アメリカ海兵隊のCH-53K キング・スタリオン<sup>カ</sup>大型ヘリは、アメリカ空軍嘉手納基地<sup>ナ</sup>のエプロンに着陸した。

空軍のガルフストリーム要人輸送機が待機している。小さなザックを背負い、頭からフードを被った客人がエプロンを走りタラップを上がついていくと、まず海兵隊ヘリが離陸した。

キャビンに入ると、客人——彼女にとっては懐かしい顔ぶれが待っていた。香港の学生リーダー

であつたアグネス・リオンはザックを足下に置くと、甕<sup>ぶち</sup>れた顔で「予定が変わつたのですか」と流ちょうな日本語で尋ねた。

「残念なお知らせがあります。まずは座つて」  
そう言つたのは、陸上自衛隊水機団の司馬光一<sup>しばひかる</sup>佐だ。彼女は会議用の対面シートにアグネスを座らせて、同じく日本語で話しかけた。

フードを脱いで目の前に現れたアグネスを見た司馬は少くないシヨックを受けたが、態度には出さなかつた。目の前の女性は、もうあの童顔が残る女子大生——民主化運動のアイドルだった頃の面影も無かつた。長い獄中生活<sup>ごくちゆうめう</sup>で頬はこけ、歯も抜けている。白髪<sup>しろが</sup>が無いのが不思議なくらいだ。

「……本来は東京で歓迎する予定でしたが、政府の上の方で、止めた方がいいという判断になりました。対中関係に配慮してのことではありません。

最終的に、わが国の政府は、あなたを守り切れないと判断したのです。情報は早々に漏れて、北京から誰かが誘拐にくることは避けられないだろうと。隠れ家を半年間も、秘密にできれば上出来だろうと。状況は、イギリスも似たり寄ったりよね」

そう司馬は窓際に座っていた英国人女性に振る。「ごめんなさい、アグネス。イギリスは狭い。そこに、これからも何十万人という香港人を受け入れることになる。そうなると、いつか必ずあなたと出くわす香港人が出てきて、あなたの居場所が遅かれ早かれ北京政府に知られることになります。日本ならば北京へ誘拐されるけれど、イギリスでとなるとおそらく現地で暗殺される。日英はあなたの亡命を受け入れられない。これは、中国との関係に配慮しての判断ではなく、純粹にあなたの安全を考慮してのものなのです」

英国対外秘密情報部極東統括官、大君主の暗号

名をもつマリア・ジョンソンは、淡々と述べた。

「アメリカ政府と、話をつけました。北米大陸のどこかに匿うのが一番安全だろうと。あなたはアメリカ政府の証人保護プログラムに組み込まれ、別の名前を与えられて暮らすことになる」

「いつまでですか？」と、アグネスは悲しげな表情をしながら英語で聞いた。

「中国の共産主義体制が終わるまで。つまり最悪の場合は、一生ということね」

「私は、何をして暮らせればいいのでしょうか……」  
「まずは整形を行い、顔を変える必要があります。あなたは有名人ですから。勉強を続けたいのなら、日本人として地方大学に留学する程度のことには許されるかもしれない。北京がどれほど熱心にあなただの行方を追跡するかにもよるけど——」

ここでパイロットがコクピットから顔を出し、離陸準備ができたことを伝えてくる。

「こんなことになって、申し訳ないわ。結局、あなたの力にはなれなかった」

司馬が詫びたが、アグネスは硬い表情で「いいえ」と呟く。そして「もう日本語を使うこともなさそうですわ」と、力なく笑った。

「……アグネス、ひとつ忠告しておきます。五年あるいは一〇年後に、人当たりのいい中年女性か高級ドイツ車に乗った投資家が現れて、満面の笑みで語りかけてくるかもしれない。人種は中国系とは限りません。日系人かもロシア系かもしれない。そしてこう言うの。「あなたの正体を知っている。でも自分はあなたの味方だから安心してほしい。今度うちのホームパーティにこないか」と。そういう人間を、決して信用しては駄目よ。向こうから近づいてくる者は、全て北京政府の手先だと警戒しなさい」

マリアは「あなたが人並みの幸せを手に入れる

ことを祈っている」と肩を抱き、別れを告げた。

その後、司馬とマリアはトラップを降りる。機体から十分離れると、ガルフストリームは星空の彼方へと離陸していった。

「……私たち、あの若者を見捨て、酷い仕打ちをしたのよね」と、マリアがしみじみと漏らす。

「もう子供じゃないわ。彼女がそうすることを望んだのよ」

だが司馬は、きっぱりとそう言った。

「それで、司馬さんの今後の予定は？」

「あたしは夜が明けたら、台北行き为民航機に乗ります。ちょっとした用事があるの。あなたはシंगाポール？」

「ええ、香港支局を完全に閉鎖して、全ての資産を処分するという最後の作業が待っている。従業員の家族も脱出させないと。香港はいよいよ私たちの手を離れて、ただの、ありふれた中国の一部

市になっていく」

「……飲みにでも行く?」

「こんな時間に!?!」

「沖縄での訓練が増えたせいで、部隊ではリストが密かに作られているの。夜戦訓練明けに朝から飲める居酒屋のリストがね」

中国は四半世紀を費やし、辛抱強く工作し、真綿<sup>わた</sup>で首を絞めるように徐々に香港の自由を奪った。結果、共産主義の旗を立てることに成功した。

諸外国の抵抗と反発は大きかったが、彼らには為す術はなかった。

香港の民主化運動は潰され、多くの人権活動家は逮捕、また国を離れ亡命することを余儀なくされた。

このことを、人々はしばらくは記憶し続けるだ

ろうが、世界はあまりにも多くの問題を抱えている。いずれ香港で起こったことなど忘れ、チャイナ・マネーの魅力<sup>みりょく</sup>に浸ることだろう。

中国は、忍耐する術を知っていたのだ。この香港での勝利で、その自信は更に揺るぎないものとなったのである。

香港問題に関わった人間の多くが酷い挫折感<sup>ざせつかん</sup>に囚われていたが、その傷も時間が癒<sup>い</sup>やす。

そのことを、司馬は知っていた。

傷が癒えると同時に、中国はまた次の戦略を發動する。

その歯車は、もうどこかで動きはじめているはずだ。



## 第一章 西門町

出だしとしては、良い初日だった。

台湾獅子舞シシマイを呼び爆竹ばくちやくを鳴らして、新装開店の飲茶屋ヤムチャのスタートを皆で祝った。

店主であり看板娘になるであろう頼筱喬ライシヤオチャオは、

こうして、日本での修業を終えるといきなり西門シーメン町ディンでの事業をスタートした。

ここは台北の原宿ハラシヨクと言われ、海外からの観光客が群むれめく繁華街。それだけに競争の激しい場所だ。そのため、彼女のことを「チャオグ」と呼び支える司馬光は、事業を成功させるためのノウハウを全て彼女に叩き込んでいた。その上、横浜中華街にある司馬の店の本店からも、コックと経理を

付けてやった。

これで成功できなければ、どこで何をやってもうまくはいかないという想いがあったからだ。おそらく、彼女はうまくやってのけるだろう。

今日最後の客を送り出して店を閉めた後は、バイトの若者たちを交え、ささやかな宴会を開く予定だ。だが司馬は「疲れたから先に失礼するわね」と店を出た。

もう自分は若くない。羽目を外す若者に付き合う体力や気力はなかった。

この日のために新調したチャイナドレスは爆竹の燃えかすを浴びていた。司馬は「嫌ね、火薬の

臭いって」と両手でそれを払いながら、淡水河沿いにある定宿へと引き揚げた。

この宿は、司馬の帰りがどんなに遅くなっても、馴染みの支配人がフロントに留まっていた。司馬は気にしないが、彼女はホテルにとつての賓客なのだ。

ロビーに入ると、ソファでパソコンを叩いている若者がいた。こんな時間なのに、きちんとネクタイを絞めてスーツを着ている。それも日本の京都大学のグッズとして知られる西陣織にしじんおりのネクタイだ。

司馬に気づくと、彼はパソコンを閉じて顔を上げた。

「あら、フミオさんじゃない。こんな時間まで何をやっているの」

司馬は彼へ向けて日本語で聞いた。フミオこと王文雄フシウケンユウは流ちょうな日本語で「今日はすみませ

ん。お店に顔を出せなくて」と詫びながら立ち上がった。

「一日中、野暮用が入ってしまいました。一杯どうですか、奢ります」

王はロビー脇のバーへと誘ってきた。

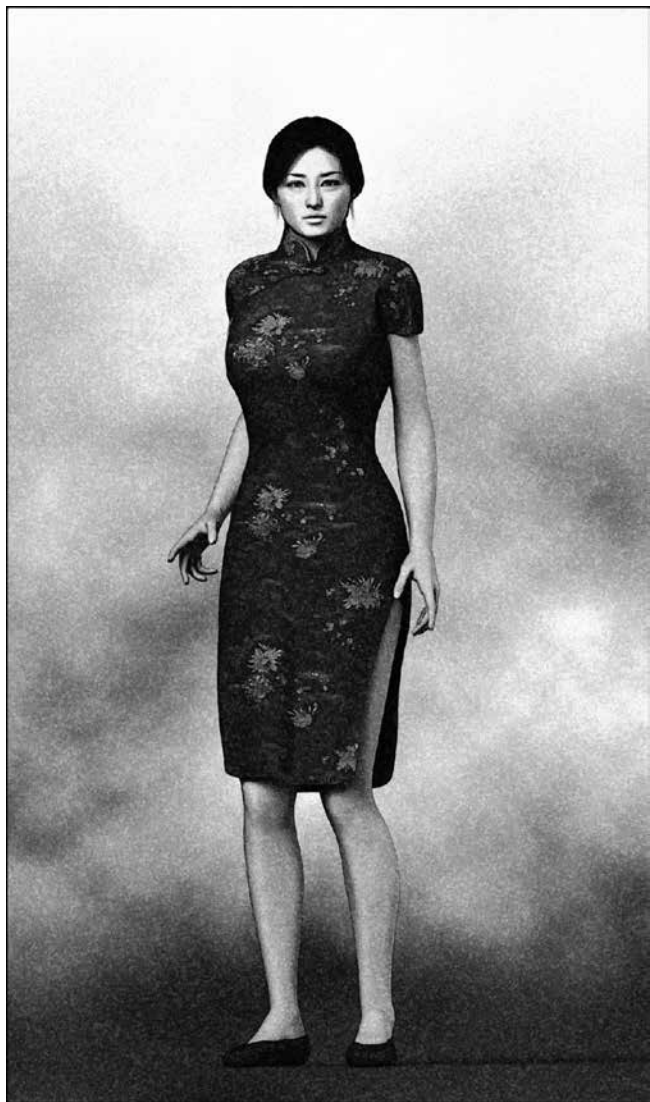
「嬉しいわね。でもあそこのバーは、あたしのことと未だに『お嬢様』と呼んでくれる支配人のお陰で、タダで飲めるのよ」

二人はバーに移動すると、一番奥のテーブルについた。司馬はいつもの習性で入り口が見渡せるよう壁を背にして座る。

「あたし、昨日というか今朝まで飲んでいたの。イギリス人とね」

「そのお相手の名前は聞かずにおきましょう。それで、お店の様子はどうでしたか」

「出だしとしては、まずまずね。私がついている全てのスキルを彼女に教えた。失敗したとしたら、



それは私の責任ね」

「そんなことはないですよ。そうだ、お祝いが遅くなりましたが、大佐殿に昇進だそうで、おめでとうございます」

「相変わらず情報が早いのね。でもあたしはただの北京語講師だから、水機団の幹部名簿には載ってないの」

「それは、いろいろと好都合だ……。いえ、店には、昨日のうちに挨拶に行きました。頼龍雲ロシュン中将のかつての部下には、もう全員にお触れが回っています。店が一段落したら、みんなで通うようにと。部隊絡みの親睦会の類も、今後はそこで行えとも言われました」

「助かるわ」

「実は、店で面白いことがありましてね。僕は初対面のつもりだったんですが、何と彼女は僕に会ったことがあると言うんです」

「確か、あなたが上京してお店に何度か来た後、彼女から聞かれたことがあったわね。あれは誰なのかって」

「僕もその時の話だろうと思っていたんですが、実は違いました。幼い頃、一緒に遊んだということですよ。それでびっくりして親父おやじに電話したら、うちは頼將軍と家族ぐるみの付き合いだと言んです。よく一緒にピクニックや海水浴に行ったんだと。父に、写真を送ってもらいました」

王はパソコンを開き、カラー画像を見せた。司馬はその写真に見入る。そして珍しく感情的な声で「ああ」と呻いた。

「もの凄く貴重な写真ね！」

「ええ。何しろ頼將軍の仕事の性格上、私的な写真など滅多に撮らなかつたでしょうから」

司馬は、自分の十代の頃の写真を他人から見せられたような複雑な気持ちになっていた。懐かし

くもあり、恥ずかしくもある。

「酷い話よね。彼が生きていたことを知らなかったのは、世界中で私ひとりだったんだから……」

「お察しします。想像もつきません。愛した人がスパイとして捕まり、もうこの世にいないなんて聞かされた時の絶望感なんて……。でも、将軍は一人娘をあなたに託たくせて本望ほんぼうだったと思いますよ。それで、あの、彼女は父親のことや自分の生い立ちを知っているんでしょうか」

「ええ。それとなく話はしてある。彼女は、いずれ私の店を引き継ぐことになるでしょう。私の仕事もね。格闘技以外のことは、全て教えた。それよりも、あなたはどうかの？ 台北市の議会選挙に出るものとはかり思っていたのに」

「僕は、台日親善協会と党の対外宣伝部次長という仕事に満足しています。やりがいのある仕事ですよ。いずれは、それも考えなきゃいけないでし

ようが」

「政治を志ちかすのに、若すぎるといふことはないわ。それにあなたはそもそも京大在学中に、それなりの資産家の娘を捕まえろと命じられていたのでしょう。そっちはどうかのよ」

「ええ、京大つてところは女つ気はないし、なにより今の日本では、外国人がそれなりの資本家のご令嬢れいじょうを探たづねること自体、ハードルは高いので」

「じゃあお店が暇な時間に訪ねていって、チャオをデートに誘いなさいな」

「え、ご冗談を……」

「本気よ。彼女には日本での後ろ盾うしろかたがあります。それに彼女にとつても、頼龍雲の一人娘ということとでポイントは高いけど、ここ台湾での後ろ盾も必要なのよ。あなたたちが組めば、それがかなう」

「スパイの家系、というやつですね。司馬さんのようなスーパー・ウーマンの素養はあるのでしょ

うか」

「それについては、太鼓判たいこばんを押します。人殺し以外の全ての素養をもっている。バヨネットの使い方を知らなくても、あの仕事はできます。とても良い子よ。父親の性格を継いでいる。まあ、ここが唯一の欠点とも言えるけど。われわれの仕事には、向いていない。……彼女には、支えが必要だわ」

「母親代わりのあなたが許可するなら——」

「許可ではなく命令です。フミオさんのお父様も、反対はなさらないでしょう。さて、本題は何かしら？」

王はやっとプライベートな話題から解放されたというほっとした顔をした。

「問題が二つ出ました。一つは、すでにお耳に入っているとは思いますが、最近、台湾近くで中国軍の活動が先鋭化しています。尖閣での動きもそ

の一つです。海空軍が一体となって電子戦訓練を丸半日行い、漁船団が母港と無線連絡できなくなったり、ミサイル艇をこちらの領海ぎりぎりまで突っ込ませて反応を探ってきたりと、やりたい放題です。とりわけ電子戦訓練は、民間人に実害が出ています。頻度ひんども上がっている。ほぼ毎日、どこかの漁場が被害にあっています。沿岸部では毎週のように上陸訓練をやっていますし。海軍は、明日目覚めた時、金門島ジンメン沖にずらりと上陸用舟艇が並んでいても、誰も驚かないと嘆いているそうです」

「備えているとは聞いているけど？」

「ええ。南の太平洋島、東沙諸島の東沙島。海兵隊は、予備役を召集してまで増強しています。ただ、いずれも守り切れるものじゃない。とくに太平洋島は台湾本土からは遠すぎるし、東沙島は近いとはいえ高雄カシウから四〇〇キロですからね。真水が出

るわけでもないし、増やせる兵力には限界があります。長期間置ける兵力は限られる。今でも島は常時一〇〇隻を超える武装漁船団に包囲されている。事故を防ぐためという理由で、中国は海警艦をその外周に配置していますが、われわれには同じ数を出して対抗する戦力はない」

「でも、それ以上は手は出せないでしょう。漁船を環礁かんしょうに沈めての基地化は阻止したことだし。次はもう鉄砲を抱えて上陸してくるしかないわよ」

「香港とも、目と鼻の先です。昨日まで、香港はこちら側だという安心感があった。ですが、もうそうでなくなつた今、香港を足がかりにしたい北京にとつて、東沙の存在は目障りになるでしょう。台湾単独では、とても守り切れない。アメリカ政府に、それなりの働きかけはしていますが……」

「アメリカ経由で、日本政府も動かすことね。う

ちの国は自分では何も決められないけど、アメリカから言われたらノーとは言えない国だから」

「その線でも、とつくに動いているでしょう。それでこの話は、現実には外から見えている話ですが、中南海でいよいよ台湾の併合作戦が承認されたという情報が流れてきました。我々の政権は今、憔悴しょうすいしきっています」

「それは初耳だわね。確度はあるの？」

「わかりません。こちらを揺さぶるための偽情報かもしれない。いくら何でも、つい先日香港を陥落させたばかりなのに、すぐに台湾工作に取りかかるだろうかという疑問もある。司馬さんは、どう思われますか？」

「チャンスには変わりないわよね。香港を黙らせただことで、軍や人民の士気は上がっている。逆に米中関係は最悪で、これ以上は悪くなりようがない。西側も今、新型コロナウイルスでの混乱の最

中であつて、それどころではない。この後、米中関係は徐々に改善するだろうことを考えれば、今を逃せばできることもできなくなる。来年、あるいは五年後は無理でも今ならできる。今なら、アメリカは動かないかもしれない。さすがに台湾本島に手を出すことはないでしょうけど、離島のいくつかを奪取する程度のことにはするかもしれないわね。その時には、尖閣諸島も餌食になるかも……」

「司馬さん、明日のご予定は？」

「市場で食材を買い込んで輸送の手配をしてから、明るいうちに那覇行きの便に乗りたいわね」

「申し訳ありませんが、出発は羽田行き最終便にしてくださいませんか。軍の高官たちが意見交換をしたいそうです」

「勘弁してよ。そういうことは東京でやるのが筋じゃないの？」

「大佐殿に出世したからには、そういうものも片づけませんと。いつまでも中華料理屋の女将おかみではすみません。それに、かつて頼龍雲が家庭教師を勤めた乙女おとめに会ってみたいという連中もいるでしょうから」

「あら、京大ではお世辞学とかも教えていたのかしら」

「小国の処世術だどご理解ください」

王はずっと日本語で喋っていた。彼は高校生に上がると同時に神戸の私立学校に編入し、寮生活をはじめた。そして一浪して京都大学法学部に入り、院生生活を終えて帰国すると、国民党の党職員として働きはじめ、後に台日親善協会の仕事も掛け持ちするようになった。

国民党は大陸寄りで見られてしばらく野党の地位に甘んじているが、いつでも政権を取れる下地はもっている。日本の野党とは大違いだった。



もし国民党が政権に復帰すれば、王はそれなりのポストに就くだろうが、それには議席が不可欠だ。本人はもとより、周囲が何を躊躇<sup>ためら</sup>っているのか歯がゆい思いだった。

司馬は、ブランデーを一杯だけ飲んで自室に引き揚げ、化粧だけ落とすと、ドレスを脱ぐ気力も無くベッドの上に倒れ込んだ。

台湾領・東沙島――。

劉金龍<sup>リウジンロン</sup>伍長（上士）は、高さ一五メートルの櫓<sup>やぐら</sup>の上に組まれた二メートル四方の見張所の中で、眠気と戦っていた。

パイプ椅子に腰を乗せ、両足を櫓の壁に預けて楽な姿勢をとろうとするのだが、何しろここは歩哨所だ。休むための場所では無く、目を開いて監視するために、わざわざぎうたた寝ができないような構造に作ってある。

隣には二名の若い隊員がいた。一人は裸眼<sup>らがん</sup>で、もう一人は暗視装置で広大な海原を見張っている。この歩哨所は東沙諸島、別名プラタス諸島のリング状のリーフの西端にある東沙島の、更に西端にあった。

東沙諸島のほとんどは干潮<sup>かんちょう</sup>時にしか姿を見せないが、直径二〇キロもある見事な指輪形の環礁になっている。この西端に位置する東沙島だけはちゃんとした陸地があり、林もある。地球温暖化による海面上昇が続けば、いずれは海面下に没する高さしかないが、今は台湾が支配している土地だ。

台湾南部の高雄から、南西に四〇〇キロ。そこから北西に三〇〇キロで香港だ。

これまででは、平和な島だった。滑走路があり少数の守備隊が配置されてはいたが、香港が香港であり続ける限りここは安全なはずだった。台湾本

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。